

# ハンセン病隔離 抵抗描く

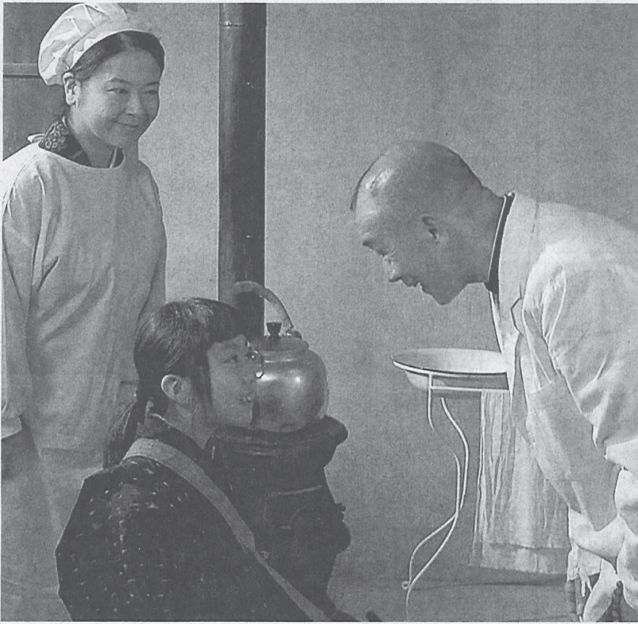
## 来月名古屋で映画上映

### あま出身 小笠原医師の生涯

国のハンセン病患者強制隔離政策に反対した旧甚目寺村(現・あま市)出身の医師、小笠原登(1888~1970年)の生涯を描くドキュメンタリー映画「一人になる」が、来月1日から、名古屋市の伏見ミリオン座で上映される。(中村亜貴)

小笠原は旧甚目寺村の圓周寺で生まれ、京都帝大(現京都市)などでハンセン病の治療と研究に携わった。「ハンセン病は不治の病ではなく、感染力も弱い」と

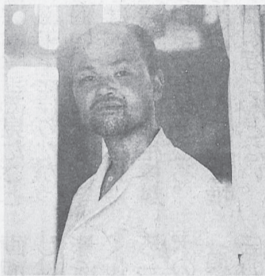
自身の医学的知見に基づき、国による患者の強制隔離政策に異を唱え、カルテの病名を空欄にしたり別の病名を書いたりして、患者を隔離から守った。



診察風景の再現シーン

手足などの神経障害が起るが、感染力は極めて弱い。「遺伝性」などの誤解があった。国による患者の隔離政策は、1996年のらい予防法廃止まで約90年間続けられた。

作品は、国や隔離政策に賛同する多くの医師を敵に回しても、患者に寄り添い続けた小笠原の人生に、かつての患者や影響を受けた医師らの証言、本人の手記などの史料から迫った。小笠原を描いた演劇「空白のカルテ」を上演したことがある「劇団名古屋」に



強制隔離政策に抵抗し続けた小笠原(いずれも制作実行委員会提供)

よる再現ドラマも挿入。患者の息子が勤め先を辞めさせられそうになると先方に説得に走ったり、患者の親代わりになったりしたエピソードを紹介し、差別や偏見に抵抗した姿を描く。語りは名古屋出身の女優、竹下景子さん。1時間39分。「ハンセン病問題を共に考える会・みえ」共同代表の訓覇浩さん(59)らでつくる制作実行委員会が企画。訓覇さんは真宗大谷派の金

蔵寺(三重県菰野町)住職で、同派がかつて国の隔離政策を後押ししたことへの反省も込めたという。2012年に隔離政策の記録映画「もういいかい」を手がけた高橋一郎監督がメガホンをとった。高橋監督は6月、大阪で開かれた作品の関連イベント中に倒れ、亡くなった。訓覇さんによると、企画趣意書にあった「一人になる」という言葉を、高橋監督が「みんなと同じでいいとならず、自分で考える。これこそ今の時代に必要なことだ」と気に入り、そのままタイトルにしたという。

訓覇さんは「新型コロナウイルスにかかっても、差別されずに安心して暮らせる社会を目指すべき今こそ、見ても見たい」と語る。上映は7日まで。2日は、上映前に劇団名古屋による「空白のカルテ」のショープレイも行われる。